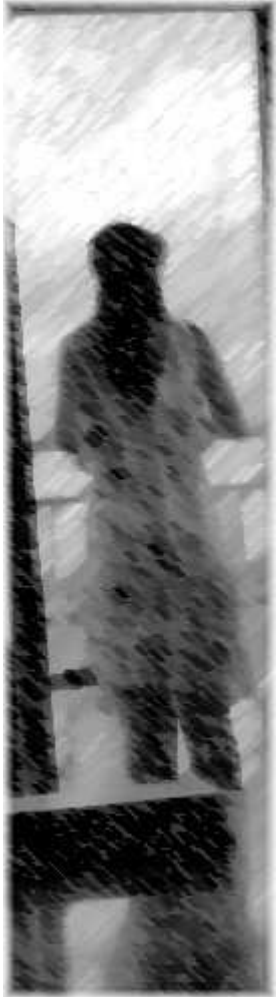


日常のあれ
これ
永遠 曇らせる
見る
その目によって
幻 あらわれる
得る者
わずか
その方は
ここにも
どこにも



今まで哲子は、幻などみたことがなかった。ただの平凡な主婦に過ぎなかったから。そして、幻というものは、「聖人にだけ与えられ、昔の時代だけのものだ」と彼女は考えていた。それに比べ、彼女の生活は、日々の退屈な家事に追われていた。料理や買い物、そして息子の学校のミーティングに行くこと、その他あまり気づかれない終わりのない要求を満たすことで。毎日、最初に起きて最後に床に就いた。夫が真夜中まで帰ってこない日以外は。しかしそんな時は、心配で、かえってよく眠ることができなかった。疲れた夫に睡眠が必要なのにどうしてこんなに遅いのかしらと。彼女はその答えを知りたくなかったが、本当は気づいていた。

八年の結婚生活。若い時に夢見ていたロマンスは、砂のようで、彼女がすっかりつかんでも、指の間から滑り落ちていった。指の節にくっついたりつかの砂の粒は、求めていたものを得られなかったことを、彼女に思い起こさせた。夫の白髪の数が増え、お腹の周りに贅肉がついてきて、彼女の望みも同じペースでしぼんでいった。今は主に母親で、子ども一人(息子と夫)の世話をしていた。教会で見た、幸せな結婚についての本は、彼女の胸にすでに葬られたものを踏みつけただけ。今週店に飾られているハーフトのチョコレートは、単に、痛みをおもいださせるもうひとつのものに過ぎなかった。しかし、いつもの単調な朝、夫がご飯を口に運ぶ時、夫の手に何かあるのに気がついた。落ち窪んで紫っぽい傷痕が。そして、消えさった。



その日の午後、マンションのエレベーターに急いで、ドアが閉まりかけたとき、かろうじて飛び乗った。よりによって、乗っていたのは冷淡な足立だけだった。いつものごとく足立は目が合うのを避け、すでにドアは閉まっているのに、何度も閉じるボタンを押していた。

足立は秋にマンションに引越してきたが、侘しそうな顔つきは季節に合っているように思えた。枝の節に枯れ葉が一枚ぶらさがっている枯れ木のようで。新米の挨拶とタオルを期待していたが何もなかった。二週間たって、冷たい雰囲気をごわすため、いつも好評のアップルマフィンを、きれいな紙に包んで持っていくことにした。足立のドアをノックすると、「どなた」ときびきびした声だけ返ってきた。明るめに返答すると、「ドアが注意深く開かれた。玄関にどうぞと言うこともなく、ありがとう」もなく、単調で完結に「どうも」だけで、ドアはボタンと閉められた。自分の家のドアに向かって歩きながら、閉じ込められた感情が、まるでガラスのフラスコが4階下のコンクリートに落ちていくように解き放たれた。どうにか、衝撃の一步手前、地面の数センチ前でフラスコをつかみ、屈辱を奥底に閉じ込めた。それが、子どもの頃からいつもやってきたことだった。

しかし、その数週間後、彼女のガラスのフラスコが奥底から煮え立った。雨の日であったが、夕食の準備に足りない物があり、コンビニに急いで行くこととしていた。黒い雲で、気がめいるような日だった。そのとき、1階で、彼女は見た。自分の自転車が、窮屈な自転車置き場からどけられて、雨にさらされているのを。屋根の下の自分の場所に、さびた緑色の自転車がかった。前輪の泥除けに、足立と書かれてあった。

エレベーターの中で、これらの記憶が哲子に迫ってきた。足立がコントロールボタンから手を引いた時、哲子は気づいた。その手にあった不思議な傷痕に。まさか！そんなこと！哲子はそれを信じられなかった。エレベーターのドアが開いたとき、駆け出して、急いで家の鍵をあげ、玄関に倒れこんだ。もう夕食の準備をする気にはなれなかった。意地悪で冷淡な隣人、退屈な夫、感謝の思いがない世の中、そして数えきれない他の不快なもの、子供時代のことさえ、ぶくぶくと沸き立ってきた。長年押し込めてきたものが黒いへドロ口のようになってふきだした。彼女は気が狂ったようになって、よるめきながらドアを通して洗面所に急ぎ、冷たい水を顔にかけた。鏡の中の苦痛をおびた彼女の顔を眺めた時、それを見た。傷跡が両手にあるのを。だが、自分の手を見下ろしたが、何も見つからない。

ベランダにいき、窓を開いて、じっとり湿った洗濯物の前に出た。あのしるしの意味を考えながら。あたり一面に重い雲が覆っている。自転車のブレーキの音がした。公園では子ども達が叫んでいる。電車が線路をとり、ガタガタと聞きなれた音がした。もし彼女が自転車のハンドルを握る手や、公園のぼっちゃりした子どもの手、電車の吊り輪を握る何百もの人々の手を見ることができれば、みんな不思議なしるしがあるのを、疑いもなく彼女は知った。その時、雲の間から陽がさした。



Appendix (付録)

マザーテレサは類まれな人生を送りました。小柄で、特別な能力や才能もなく、ポケットにはたった数ルピーしかありませんでしたが、世界中の注目をあびました。なぜでしょう？マザーテレサが、世界中に影響を与えたのは、おそらくただ、彼女が人々を見る見方によつてでしょう。「すべての人は、わたしにとってキリストです。イエス様はたったお一人ですから、その人は、その瞬間、世界でたった一人の人なのです。」彼女が人を見たとき、彼女はイエスキリストを見ました。彼女が化膿した傷口を洗ったとき、それは、彼女がイエス様の体に触れたのでした。死にそうな子供に水を飲ませたとき、それは、彼女が子供のイエスさまを抱いたのでした。

この話の中の傷痕は、それぞれの人の何かを明らかにします。すべての人が、不思議にキリストにつながっているということ。この話は、単なる作り話だということかもしれません、私達も毎日そのような現実に向面します。人類はキリストに結ばれ、それぞれの人も、何らかのかたちでつながっているのです。キリストに属するものにとつては、キリストの体の一部として。もしくは、まだキリストを知らない人にとつては、カルバリーの愛の対象として。

イエス様ご自身の言葉は、私達を揺さぶります。世の終わりに、私達の生き方が、あの現実立ちおおせたかどうか裁かれるのです。キリストが様々な場所におられたと認識できたかどうかを。

そうして、王は、その右にいる者たちに言います。「さあ、わたしの父に祝福された人たち。あなたがたのために備えられた御国を継ぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹であったとき、わたしに食べる物を与え、わたしが渴いていたとき、わたしに飲ませ、わたしが旅人であったとき、わたしに宿を貸し、わたしが裸のとき、わたしに着る物を与え、わたしが病気をしたとき、わたしをたずねてくれたからです…」

マタイ 25: 34 40



Dr. Andy Meeko

アンディ美湖は家族関係で全国的に講演をしている神学博士。1947年に日本に宣教に来た両親を持つ宣教師二世。妻、純子と4人の子供と共に山形に住んでいる。
www.drmeeko.net

終わりに、基準が定められています。私たちが得たかどうかを決める、私たちの人生の核心は簡単です：私たちは、イエス様のようにすべての人に接したかではなくて、すべての人に、イエス様に対するよう接したかです。私たちの人々に対する扱い方は、イエス様に対する扱い方です。隣人に対する振る舞い以上に、もしくは敵に対する以上に、イエスさまに振舞うことにはないのです。こういうわけで、すべての人に対する行為は、意味深いのです。永遠につながる意味があるのです。

訳：美湖純子